

弔 辞

百 濟 勇

(外国語部長)

小林先生！ 私はいかなるお別れの言葉を申し上げてよいのかわかりません。小林先生！ よくアメリカでの『ニュー・ハンプシャー・シンポジウム』の件でお話しいたしましたね！ ゲルマニストは勿論のこと、DDRに関します政治、経済、社会、歴史などの分野の研究者が一堂に集まり、1週間にわたってのシンポジウムです。問題提起の多様性、徹底した議論など『密度』の濃さに圧倒された印象をお話しいたしましたね！ とりわけこのシンポジウムに参加しているアメリカ各地の大学に所属している女性研究者の熱心さ、粘着性には敬服したと、申しあげました。かかる『ニュー・ハンプシャー・シンポジウム』には私ではなく、小林先生こそ参加すべきであると、申しあげました。

先週末、その事務局から、来年6月に開催する『第16回DDRに関するニュー・ハンプシャー・シンポジウム』の招聘状が届きました。そのコピーを月曜日に、月曜日にです、先生にお送りしようと思っておりました。その月曜日が、先生とのお別れの日であろうとは！

先生は昭和50年から非常勤講師として、昭和52年から専任講師として駒沢大学外国語部にご所属いただきました。私ども外国語部所属の教員は研究条件、労働条件の改善に努力してまいりました。その点、わが駒沢大学外国語部は、先輩諸氏のおかげで良き出発条件を与えられ、約20年近くの歴史を経る事が出来ました。外国と比較いたしまして日本の場合、とりわけ研究条件の改善に關しましては、同僚関係が重要な役割を演じます。かかる良き同僚関係が、私共の職場に伝統として定着しつつあります。小林先生は、先生の実力、そしてあのお人柄により、こうした伝統の定着に大きな役割を演じていただきました。先生のご専門で、アメリカの女性研究者との新たな交流をも含め、あまりにも

為すべきお仕事を多く残され、旅立たれた事が残念でなりません。小林先生に築いていただいた、かかる伝統をさらに引き継ぎ、駒沢大学外国語部の一層の発展を図りたいと思います。これまで外国語部には勿論のこと、駒沢大学全体にご貢献いただいた事を感謝いたします。先生、肩の荷をおろし、ゆっくりと安らかにお眠り下さい。

弔 辞

上 坂 修 夫

(駒沢大学教職員組合1984年度執行委員長・現副学長)

小林先生

先生の突然の訃報に接してやり場のない悲しみに包まれております。

この一、二年学内でたまにお会いした折など、この頃お体の具合はいかがですかとお伺いしますと、ええ、まあまあ何とか頑張っていますと云っておられた先生のにこやかなお顔を思い出し、もうお会いできぬ淋しさにどうすることもできぬ思いであります。

同じ大学に勤めながら学部も専攻も違う私が、小林先生とお話をするようになりましたのは、昭和59年の夏から1年間、教職員組合の執行委員としてご一緒に仕事をさせて頂いたからであります。その当時、私たちの大学では、宗教法人と学校法人の制度的な分離を進めるという困難な事態に直面しており、そのため組合もそれに関連した多くの業務が必要でした。団体交渉も通常の交渉のほかに寄附行為改訂のための対理事長交渉が繰り返され交渉回数は年間を通じて30回にも及びました。

小林先生は、これらの団体交渉の議事録作成という目立たず労多い作業を担当されましたが、深夜まで続く議論の中のちょっとした言葉の表記一つでも紛糾のもとになりかねない事態の中で、その困難な仕事に全力を尽して当られる先生に対し、私たちは皆、常に頭の下る思いを感じておりました。その一年間

に経験したさまざまな苦しみや喜びの中で、先生はどんな場合にも穏やかな笑顔を絶やさず、私たちを元気づけて下さいました。ちょうど組合が結成されて十周年を迎えた日に行われた祝賀の集りの折や、アフリカ飢餓難民援助募金として教職員や学生有志から寄せられた、予想を遙かに上まわる重い重い貨幣の詰ったリュックサックを背負って新聞社に届けた際などの先生の本当に暖かな笑顔も忘れることができません。

先生とご一緒に仕事をさせて頂いた時期のことを考えますと、無言のうちに、実に多くの事を教えて頂いているのに気付きます。とくに、あらゆる事を自分を勘定に入れずに、そして、決していからずいつも静かにほほ笑みながら、誰もが避けるような地味な苦勞の多い仕事を率先して実行することの貴さを知らず知らずのうちに学ばせて頂いた、本当にかげ替えのない先生であったことを今しみじみと感じるのであります。

小林先生、有難うございました。

どうぞ、安らかにお眠り下さい。

心からご冥福をお祈り申し上げて弔辞といたします。

弔 辞

松 本 洋 子

(ドイツ語)

小林さん！　とうとうお別れしなければならぬ時がきてしまいました。8月9日、あなたが再度入院なさった頃から、私も覚悟しなければならぬと思うようになっていました。夜中に目を覚ますと、病床の小林さんの姿、お元気だった頃の小林さんの姿、その時々表情が次から次に浮かんで来て、寝付かれないことがしばしばありました。病床で辛い思いをしていらっしゃるあなたに何もしてあげられないと思うと、たまらない気持ちになりました。でもそれ以上に、すでにご自分の最後を思いながら、病魔と戦わなければならなかった

小林さんは、どんなに辛いお気持ちだったことか。才能にも、仕事にも、またやさしい立派なご主人にも恵まれて、あなたはほんとうに幸せでした。長い間望んでいらしたご主人の大学への移籍も実現しました。多くの友達に愛され、慕われ、個人生活の面でも、研究の面でもこれからが本番、やりたいことは山ほどあったと思います。どんなに無念だったことか。

私達が知り合ったのは法政大学の講師室でしたね。ついこの間のように思い出されます。はじめは元気なかわいい先生だなーと思っていました。同じ非常勤講師をしていらした松永さんと3人は、どういふわけか仲良くなりました。私達3人は、ご主人の常利先生も一緒に、よくいろいろの所へ出掛けて行きました。芝居を見るのも、食事に行くのも一緒でした。私のアルバムには18年近い小林さんとの楽しい思い出がいっぱいです。でももう、その思い出を語り合うあなたはいません。年とともに培って来た友情は人生の支えでもあるのです。自分達の歴史の中で、共に歩んで来た友人がどんなに大切なものか、またそれを失うことがどんなに辛いものか、今つくづく味わっています。お互いのために健康には十分注意しましょう、といつも話し合っていたのに。私が定年になっても、小林さんはまだ今の私ぐらいなんだから、私は頑張らなければ、と、あなたによく言っていたでしょう。それなのに、ずっと若いあなたの方が先にいってしまうなんて、人生には番狂わせがあると思っていましたが、まさかこんな番狂わせがあろうとは夢にも思っていませんでした。

小林さんは何事にも慎重でしたが、その反面非常に好奇心が旺盛でしたね。だからあなたといると、退屈するということがありませんでした。

八木先生のお弟子さんだということを知って、早速東京のワイマル友の会に誘ったのですが、それから後は、誘った私よりもあなたの方がずっと熱心な会員になってしまいました。専門がドイツ文学ということもあって、よく研究会にも出席されていました。あなたは控え目だったけれども、責任感がとても強かったので、ゲルマニスティンネンの間でも、いつの間にか中心的存在になっていました。友達に対しても、仕事に対しても、もちろん研究に対してもあなたは誠実な態度を貫いていらっしやいました。入院中小林さんの論文「アンナ

・ゼーガースの亡命体験」が史学雑誌という、東大史学会発行の月刊誌に取り上げられ、高く評価されているのを知って、控え目に、でもとても嬉しそうにそのことを話していらっしゃいました。あなたの論文はいつも多くの研究者から注目されていました。私はそんな小林さんが、駒沢大学にいらっしゃることをとても誇りに思っていたのです。

みんなに愛され、期待されていたあなたが、46才という若さでいってしまわれたことは残念で、悔しくてたまりません。でも辛い治療にも耐え、重い、痛い腕を抱えて、ずっと苦しんでいらした小林さんのことを思うと、今やっと楽になれたんだから、と、自分に言い聞かせて、小林さんのいない寂しさに耐えて行かなければいけないと思っています。どうか安らかにお眠り下さい。小林さん、さようなら。

小林佳世子先生追懷

栗原万修

(ドイツ語)

世の中には思いがけないことがたくさんあるが、小林佳世子先生が私より先に亡くなるなどということは、まったく夢にも考えなかったことである。頑健というほうではなかったが、いつも健康に気をつかわれ、大学を休むなどということも滅多になかった人である。小林先生のことを考えると、人間の生死はまったくわからないものだなあ、とつくづく思えてくる。

私が小林佳世子先生にはじめてお会いしたのは、もう15年近く前のことになるだろう。非常勤で出講していた明治学院大学の講師室で、はじめて先生にお目にかかった。小柄でかわいらしく、最初、学生ではないかと思ったくらいである。先生も当時、同大学の非常勤講師をされておられ、毎週一度お会いして親しく話すようになった。まだ30歳になるかならずの若い先生だったが、はじめの見かけとちがい、おつきあいしているうちに、学識も深く、大変しっかり

したお人柄であることがわかってきた。いろいろ教えられることも多かった。しかし、私は駒大に教職員組合が出来たのを機に外の仕事は一切やめたので、小林先生とお会いするのも1年間で終わってしまった。

ところがその後、本学に非常勤で小林先生をお迎えし、さらに専任としてお願いすることになった。昭和52年、ドイツ語教室で専任講師の増員が決まったとき、多くの候補者のなかから小林佳世子先生は教室全員の賛成を得て決定した。経歴、業績、人柄、ともに異論がなかった。京都大学大学院の博士課程を修了後、関西のある大学で専任講師をされていたこと、長期留学をされた経験があること、人物について何人かの保証があったこと、そして何よりもトーマス・マンに関するすぐれた業績があったことで、専任講師として適任であると教室全員の意見が一致した。こうしてドイツ語専任7名中、3人目の女性教員として小林佳世子先生をお迎えすることになったのである。先生は最も若い講師だったが、専任になられてからもドイツ語教室のため、そして外国語部のため、いろいろな雑務もいやがらず率先して引き受けてくれ、いつの間にかドイツ語教室になくってはならない人となった。

小林先生は、どちらかというと几帳面な完全主義者で、結論が出るまであれやこれやと迷われるのが常であった。大きなことでも、小さなことでもいつもあらゆる局面を考えて迷われていた。適当でいいですよ、と端でいっても、そうですかといいいながら、やっぱり悩んでおられた。しかし、それだけに先生の担当された仕事はミスがなく、信頼できた。例えば時間割の仕事を分担されると、その表を四六時中カバンに入れて眺めておられたようだ。文法と講読担当の先生の組合わせは？ 時間帯は？ 二部の授業との関係は？ と非常勤の先生のことでも私的なことまで実にこまかい配慮をしながら、あれやこれやと考えておられたので、非常勤の先生方からも苦情の出ることはまったくなかった。また、先生はよく講師室に出向かれて非常勤の先生方のお相手をされているのを見かけたが、いかにも小林先生らしい心配りで、非常勤の先生方に少しでも気持よく仕事をしていただきたいという専任としてのお心からだったろうと思う。同僚だけでなく、非常勤の先生も大事になさる方であった。懇親会なども小林

先生にまかせておけば問題なかった。会場の選定も、料理も、あれやこれや迷いながら、やっぱりきちんと選んでくれた。

外国語部内の委員としても、また教授会で選ばれた部外の委員としても先生はまったく手を抜くことなく、その責務をはたされた。ふだん小林先生は、教室会議でも教授会でもあまり積極的に発言されるほうではなかったが、しかしそれだけに先生が発言されると多くの人を納得させた。

そして小林先生の偉いところは、勉強もちゃんとやっておられたし、いろいろな情報をたくさん持っていてそれをいつも私たちに教えてくれながら、決して自分からは出しゃばらないことだった。目立とうとする風はまったくなかった。いつも控え目で、自分よりは他の人を立てた。学識も深く、それだけに密かに自信をもっておられたようだが、それをひけらかすようなことは全くなかった。俗にいう「能ある鷹は爪を隠す」ということだったのかもしれない。

また小林先生の知られざる一面としては、ご主人への愛情の深さをあげることができよう。世に「愛妻家」という言葉はあるが、妙なことに「愛夫家」というのはないが、小林先生は、いってみれば文字通りの「愛夫家」といってよかったかと思う。先生はいつも私の「主人」といわず「夫」といっておられた。あるとき小林先生は笑いながら、「私は事を決めるときいつも迷ってばかりいたが、夫を決めるときだけはまったく迷わなかった」といわれたことがある。たぶんその通りだったのだと思う。よくご主人の話をされた。

小林先生がご病気になり入院されたとき、お見舞いに行くと、たいていご主人が看病されていた。若くして結婚されたが、お二人はほとんどいつもご一緒におられたようだ。旅行されるときも、観劇や食事で外出されるときもご一緒だった。珍しいくらいの「愛夫家」だっただけに、葬儀場での先生のテープの、ご主人を想うあの言葉はどんなにつらい思いで吹き込まれたものか想像するにもあまりあるものがある。小林先生が最も無念と思われたのは、ご主人をおいて先立たねばならなかったことではないだろうか。ご主人は先生が亡くなられた年の4月、慶応大学医学部の教授になられた。小林先生がご病気にならなければ、近い将来、ご一緒に外国留学もなされたであろう。先生は、それをどん

なに楽しみにしておられたことか。そのことを知っていただけに、いっそう気の毒に思えてならない。

それから小林佳世子先生は、また愛書家でもあった。トーマス・マンやハイน์リヒ・マンなどの珍しい本のほかに、先生が関心を抱き、長い間収集されておられた女性問題関係の書物もたくさん蔵書されていた。先生が関係されておられた「ゲルマニスティネンの会」のために役立てたいという考えもあったようである。ご自宅と研究室にたくさんもっておられた。そしてそれらの貴重な蔵書をもとに、先生はまとまった研究をすすめようと計画を立てはじめた。その矢先のご病気であり、死であった。このことも先生には無念であったに違いない。

小林先生は死後これらの主要な本をすべて本学の大学図書館に寄贈されることを遺言されていたそうで、ご主人より大学への多額の寄附金*とともにその蔵書寄贈の申し出を受けた。私が図書館長をしている間にというご主人の配慮から、ご主人とすれば残しておきたいと思われる本もあったであろうに、十分その選別もされぬまま急遽ご寄贈いただいた。2000冊近いそれらの貴重な書物を小林先生から寄贈されることが、私の図書館長としての最後の仕事の一つになろうとは全く思ってもみなかった痛恨事である。胸の痛むつらいことだったが、小林先生のご遺志を受けて、貴重な蔵書のご寄贈をありがたく受け取った。いずれそれらの書物は「小林文庫」となって、学内外の多くの人たちに役立つことになるであろう。小林先生およびご主人には厚くお礼を申し上げるとともに、いわば小林先生の形見であるそれらの書物が、先生の代りにいつまでも駒澤大学で生きつづけることを願ってやまない。

それからもう一つ、小林先生のことを書いておかねばならぬことがある。先生がトーマス・マンやハイน์リヒ・マン等の研究をされておられたことはすでに述べたが、先生は政治的なことにも無関心ではなかった。そして組合活動にも積極的に参加された。とくに6年ほど前の執行委員会のことは忘れることができない。小林先生は私と一緒にやりたいということで、予定を1年早めて執行委員を引き受けられた。

ちょうどそのときは、組合活動も学園民主化の運動が頂点に達した最も重要な、最も多忙な時期とってよかったです。学長公選制を中心とした寄附行為改正を目指し、民主化団交がつづいていた。緊迫した空気のなかで団交が深夜にまでおよぶことが度々だった。団交での一言半句が大きな意味をもち問題となった。当然、団交議事録が重要なものとなった。それで新執行委員会内で役割を決めるに際し、小林先生の書記役は真っ先に決まっていた。書記は先生をおいてほかにはないと思ったからである。事実、予測した通り小林先生の議事録はすばらしかった。

おそらく組合結成時の団交をのぞけば、あれほど緊迫した、激しい、火花の出るような団交は少なかったろうと思う。理事長、総長をはじめ当局の人たちも実によくがんばられた。団交はしばしば深夜におよんだ。その長い、長い団交の間、小林先生は一瞬の休みもなく、もくもくと議事録をとりつづけた。どれほど疲れたことだろうか。一時も気の抜けない大変な仕事である。小林先生と、もう2人の書記の人たちと協力してつくられた議事録は完璧とってよかったです。大変な能力と労力であった。60ページ、80ページ、時には100ページをこえるそれらの議事録は、ほとんど速記録に近く、当局もまったく異議をはさむ余地がなかった。毎回、当局は文句なく確認印を押してくれた。そしてその団交議事録がどんなに威力を発揮したことか。いつも前回議事録をつぶさにしらべ、問題点、矛盾点を検証し、団交にのぞんだ。寄附行為の改正にあたり、組合の主張がほぼ全面的にいれられたのは、小林先生を中心として毎回作成された議事録のおかげとってても過言ではないと思う。

小林先生はどんなに疲れても決して泣き言をいわれなかった。執行委員会も1度も休まれなかった。持ち前の責任感と才能をフルに発揮され、ほかの執行委員の仕事まで手伝ってくれた。なかなか出来ないことである。目立たない、いわば縁の下の力持ちのような仕事をいやがらずに引き受け、それを完全にはたただけでなく、委員会の雑用もすすんで手伝ってくれたのである。小林先生は執行委員全員の信頼を得ていた。それゆえ、小林先生のご葬儀に同期（第11期）執行委員の人たちが参集し、弔辞をのべ花束を捧げたのも当然であった

ろう。当時はまったく予想もしない事態であり、驚きと悲しみが人々の心をおそった。葬儀の終わった後、同期執行委員のある人は、これまでこんな悲しいお葬式はなかったといって涙を流した。おそらくその想いは、小林先生をよく知るすべての人たちの気持でもあっただろう。

小林先生に接した人は誰でも、先生のやさしさや謙虚さに惹かれた。先生を知る外国語部の人たちはむろん、他学部の先生も非常勤の先生も、そして学生たちも先生に好意をもち、先生の人柄を愛した。そしてあまりにも早かったその死を悼んだ。

最後に私もまた、多くの人たちとともに小林先生の死を惜み、改めて小林佳世子先生の霊前に心から尽きることのない哀悼の意を捧げたいと思う。

〔編集者注〕

*平成2年1月20日小林佳世子先生の御夫君常利氏より駒沢大学外国語部宛に葬儀に対する礼状を頂いた。その中で氏より大学に対し佳世子先生のご遺志に基づく300万円の寄付のお申し出があった。このため外国語部長百濟勇、柴野博子、松本洋子の三氏が小林氏のご自宅に伺い、小切手をお預かりし、大学にお渡しした。

この寄付金の用途については佳世子先生のご遺志を最大限反映する形のものにするよう検討している。なお、小林常利氏に対し栗田伸美理事長、桜井徳太郎学長連名で礼状が送られた。

小林佳世子先生の思い出

宮 本 絢 子

(ドイツ語・日本女子大学講師)

先生が昨年9月に亡くなられてから、もう半年がすぎました。時がたてば、悲しみも薄らぐとと思っていましたが、ああ、こんな時に先生がいてくだされ

ばと感じることが多く、改めて、いかに大切な人を失ってしまったかを深く知り、心の痛みは増すばかりです。

このような思いの私たちに、卓上の写真の中から先生はその優しいお顔で何を話しかけていらっしゃるのでしょうか。

私は10数年以上も前から駒澤大学で、ドイツ語の非常勤講師をさせていただいておりました。つまり先生とは10数年以上もご一緒させていただいたことになります。ご一緒させていただいたこれらの年月がどれほど貴重なものであったかを、今しみじみと思い返しております。

小林先生というとてもお姿が目につかぶでしょうか。重そうな鞆を持って、元気よく、にこやかに講師室に入っていられませんか。お通夜の席でお父様がおっしゃっていました、「子供の頃から、夏休みなどで出掛けるときにも、読み切れないほど沢山の本を抱えていく子でした」と。いつか鞆の中から郵便物の目方を量るスケールを取り出されて、私たちに驚かされたこともありましたね。

このようにあらゆることに備えて、周到な準備をなさっていらしゃいましたのに、癌という病魔に負けてしまわれたことが、ほんとうに悔しくてなりません。ご病気にかかれてからも、それについての専門書を読まれ、二度の手術を乗り越えられ、冷静に病気と対決なさっていました。学校のお休み中にこの二回の手術をなさったことから、先生の授業に対する熱意が伝わってまいりました。授業を持たれた最後の年の火曜日二時間目は、先生とはたまたま担当が、経営学部の二年生で、教室も隣、教科書も同じということになりました。私が教室に着く頃には、先生の授業はもう始まっていて、終わりのチャイムが鳴っても、先生の教室のドアはまだ開きませんでした。授業中もお隣から先生の元気なお声が漏れ伝わり、その熱気が感じられました。また先生とはどんな風に授業を進めているかについてもよくお話ししました。私の意見に耳を傾けられていましたが、私が学ぶことがどれほど大きかったことでしょうか。

亡くなられる前年の末に温熱療法のために三度目の入院をされ、治療が長引き、年開けの授業ができなくなり、胸を痛めていらしゃいました。休講の掲

示に気づかなかった学生はいつものように教室に集まっていたので、先生が休講なさることなど考えられなかったのですから。都合でいらっしやれないと伝えますと、信じられないといったふうに、どうかなさったのですか、この次の時にはいらっしやいますか、と口々に尋ねられました。学生たちが書いた先生への手紙を病室へ届けますと、とてもうれしそうでした。あれほど教えることに情熱を注がれ、学生をご自分の子供のように慈しまれた先生にもっとたくさんのお学生を教えていただきたかったと思っています。

先生のお心遣いは学生だけではなく、非常勤のものにも向けられていました。組合での書記というお仕事にも打ち込まれ、労働条件の改善に努力してくださいました。また今年で満十年を迎えますゲルマニスティネンの会（ドイツ語学文学女性研究者の会）の創設に力を尽くされ、女性研究者の地位向上に力を注がれ、いまでは会を知らない人はいないまでになりました。この間に読書会を発足させ、月1回女性関係のものを読み続けてきましたが、先生は病気になられるまで一度たりとも欠席なさったことはないのではないのでしょうか。

また先生はご自分のご病気の経過を熟知なさっていました。お亡くなりになる4か月も前にお別れの言葉をテープに吹き込まれていらしたことを知ったときには息をのんでしまいました。そうとは知らない私たちの励ましの言葉をどんな気持ちでお聞きになっていらっしやたのでしょうか、辛い孤独な戦いを本当に立派に戦い抜かれました。そして私たちに多くのものを残されていらっしやいました。独文関係だけではなく、史学関係の注目をあびた「アンナ・ゼーガースの亡命体験」が先生の最後の論文となってしまいました。皆が先生のごこれからのお仕事を期待しておりましたのに。先生ご自身もどれほどご無念だったことでしょうか。先生は後に続く方々のために、とご自分のご本をすべて学校にご寄贈なさいました、貴重な本がたくさん含まれ、どれほど私たちの励みとなることでしょうか。私自身も先生から多くのものを譲り受けました。これらのものを生かして、感謝のうちに研究に打ち込んでいきたいと思っています。

先生はご遺言で「そよ風となって皆さんの近くにいる」とおっしゃっていました。私たちが静かに耳をかたむけると先生のお声が聞こえてきます。私たち

もいつかこの世の生を終わり、先生に再びお目にかかったときに、多くのことが語れるように、充実した時を過ごしていきたいと思います。その時までさようなら、Auf Wiedersehen!

小林佳世子さんのこと

五十嵐 信子

(ドイツ語・日本大学医学部助教授)

いくつかの忘れられない師走があるが、それは今からたしか3年と少し前の師走だったと思う。“Frauen schreiben”の読書会のあと、本郷の「かねやす」の店の近くで夕食をしたのだった。私たちはしっかりした料理を頼んだのに、佳世子さんはあっさりしたものをほんの少し口にされたただけだった。これ以上体重を減らしたら体力が落ちてしまうだろうに、絶食療法のせいで小柄な身体がいっそうかぼそくなり、こんなに熱心に遠いところまで通って治療しているのに治らないなんて彼女の不調しつこいなと、私たちはふと思った。春ごろからあまり調子がよくなく、あんなに熱心だった“Frauen schreiben”も休みがちだった。このときもう彼女が乳癌かもしれないと聞いていた気がする。早く診察を受けて必要なら治療を受けてほしいのに彼女がそれをしたがらないのは、数年まえにお母様を癌でなくされ、西洋医学に不信感を抱いたからだったろうか。それにしても、この春松本洋子さんはドイツへ発たれるまえに、ご自分の経験から、とにかく一日も早く医師の診断を仰いで治療を始めるようにと懸命に説得につとめ、ドイツからも何通も手紙を彼女に送って説得を続けられたのだった。その間佳世子さんも手をこまねいていたわけではなく治療につとめたのだが将があかず、第一回めの手術をこの冬に受けたのだった。けれどもその後1年足らずで第二回めの手術を受けなければならなかった。それから転移との闘いだった。その一つは、40度ちかくにまで温めた血液を身体に循環させることで熱に弱い癌を叩こうという方法だった。40度の高熱に耐える苦

しいこの療法には、麻酔をかけて行うのだと聞いていた。今思うと、佳世子さんに出会えたあの金曜日ごと、ドイツ語の再履修のクラスをどうしようとか、停滞している研究会をどうしようかなどと呑気な話をしていたその時、彼女は命をかけた闘いの真只中にいて、気も狂うような不安と絶望にさいなまれながら、人にたいしては平静な日常性での対応を貫いたのだった。それを思うと胸のつぶれる思いがする。人が最後に向き合う死という難事業を、佳世子さんあなたは何と立派になしとげたのだらう、私にはどんなにがんばってもできない気がする。決して自分のことを大声で言わない佳世子さんだったから、いつも控えめで辛抱強い彼女のことだから、首筋に傷跡ができるほど放射線をあび、腕の痛みで夜も眠れないと聞いていながら、私はそれをしっかり受けとめなかった気がする。いま私をどきっとさせる後悔は、彼女の苦しみ、悲しみを軽減するために自分が何も為しえなかったことである。この後悔の念は私の心にもぐりこんでゆき、彼女はいまや一つの課題となる、それは彼女が身をもって示しつつけたこと、人は良心とどう折り合いをつけながら生きてゆけるのだらうかということである。

小林佳世子先生の思い出

矢 島 直 子

(英 語)

キングス・カレッジの修士課程の授業「ルネッサンス」で、ミルトンの追悼詩「リシダス」「ダモニスを悼んで」を読むことになっていた日の朝、ドイツ語科の柴野先生からお便りを頂いた。内容は、小林佳世子先生の「思い出」を書くように、という御依頼だった。何という偶然の一致だらうと考えながら、ロンドン大学に向かったものである。二つの詩を担当の先生の御指導で読みながら、小林先生のことを思わずにはいられず、複雑な心境だった。ミルトンのような名詩を捧げることはできないが、思い出であれば書くことはできる、と

考えて、柴野先生にお引き受けする旨お返事した。

そのしばらく前、小林先生に夢の中で再会したのだった。亡くなられたことは言うまでもなく、御病状を楽観的に考えていて、小林先生にお会いしないまま、ロンドンに来てしまったことも痛恨事となっていたため、夢を見たのだと思う。たとえ夢の中であっても、もう一度お会いできてうれしかった。いかにも小林先生らしく、律義でいらっしゃるのがよく分かる夢だった。

この律義さと誠実さが他の長所よりもいっそう目立つ特徴でいらしたと思うのだが、それがまた仇となったような気がする。先生に親しく接することができたのは、大学の組合で代議員、執行委員を御一緒したからだった。その間、先生は本当に手抜きをせずにお仕事をなさったと思う。大勢で仕事をする代議員のとき以上に、小人数で働く執行委員時代は、先生の有りようがよくわかる時でもあった。お元気な頃、授業を無遅刻、無欠席で務められたと伺ったことがあるが、組合でも同様に、まずめったなことでは欠席、遅刻をなさらなかった。当時は駒沢大学の「寄附行為」の問題が大詰めに迎えていた時であったから、団交も執行委員会も回数が多く、各委員の仕事も他のときとは異なる面もあったようだ。書記を仰せつかった小林先生をはじめとする私たち三人の仕事は、団交のときに議事をつぶさに書き取り、順番でそのうち一人が三人の議事録を集めて、できるだけ細大漏らさず清書をすることだった。それで仕事が終わるわけではなく、清書すると、執行委員長、書記長のみならず、当局の関係者も目を通して下さり、間違いを指摘なさり、その箇所を訂正した後、書記長から出来上がり、とお認め頂くようになっていた。小林先生のノートは大事な点をきちんと把握してあり、しかも細かいところまで書いてあり、清書はと言えば、訂正箇所が少ない点で際立っていた。要点をよく押えたノートの取り方から頭の切れる方だと察しがついたが、状況判断の的確さも持ち合わせていらしたのだと思う。また、清書のときに、ずいぶんと神経を使われ、エネルギーも割かれたのだろう。

ことは組合にとどまらず、一事が万事でいらしたのだと思う。授業、各種委員会、会議、研究と。今思えば無理を重ねていらしたのだろう。病気になられ

てからも、出来る限り、出校なさっておいでだったようだ。よい意味で優等生と申し上げられる方だった。でも、それが命をすり減らしてしまわれた元でもあられたのだろう、とお痛わしい思いがする。

もっと御自分を大切にさせて頂きたかった。また、御自分の思うことをもっとおっしゃるお人柄であればよかったのかもしれない、と考えたりもする。だが、今となっては手遅れだ。無念でならない。一方で、先生のそういうお人柄であればこそ、周囲の人たちに、深い悲しみを残して逝かれたのだと思う。職場における優しく良き先輩を失った打撃は深刻である。‘Those whom gods love die young’（「神の愛でたまいし人は早死にする」）と西洋ではローマ時代の昔から（似た表現の起源をたどればギリシャ時代から）言うようだが、そう考えても、嘆きが減るわけではない。せめて、御夫君の小林氏が御挨拶状で書いていらしたように、魂になられて、お好きな所を自由に飛び回っていらっしゃるとよい、と願うのみである。御冥福をお祈り申し上げます。

イン・メモリアム

岸 本 茂 和
(英 語)

礼讓の垣根をはさんで辞儀をし、挨拶をかわし、みじかい会話のとりやりをする。馴擾におちいることを好まず、狗児のごとく狎戯することを謹慎する。礼讓あるがゆえにひとひとのあいだは円転し、また、円円として缺けるところがない。

小林佳世子先生は礼讓の人であった、と言おうとしてぼくはしばらく低徊することを余儀なくされる。礼讓にもおのずから遠近があり厚薄があろう。幽明境を異にした故人を回想しようとして、往事茫々として無常迅速の嘆きをなげくだけが後人のつとめではない。

小林佳世子先生を語ろうとするとき、トポスを抜きにしてはなにごとも語れ

ないという思いがぼくにはある。

わが家では、ことに細君のほうは、姓をおなじくする夫の大学のふたりの同僚の先生方を、たまたま三つ並んだ駅の、左側のほうのドイツ語の先生を「タマプラの小林先生」、右側のほうの英語の先生を「江田の小林先生」と言って区別するのを常とした。ぼくたちがその「タマプラ」（正しくは「タマプラーザ」というべきだが、このあたりに住むものたちのおおくはなぜか、鉄道会社の言語的無神経にたいして復讐するかのようにつづめて「タマプラ」と呼ぶ。）と「江田」にはさまれた郊外電車の沿線の小駅を利用する新開地の住人になったのと、「ドイツ語の小林先生」が都内から徙居してきてわが「タマプラの小林先生」になられたのとは、あまり時間の隔たりはなかったように思われる。

この鉄道の沿線の、しかも横浜市内にはいったこのあたりには、美しが丘とかあざみ野とかいかにも新開地らしい気恥ずかしさを覚えるような星莖主義的命名法にのっとりた地名が点在している。緑区を冠してリターンアドレスを手書きしなければならない場合などには、すこしく自意識過剰で昔人間のぼくでなくても、すべからず地名は、たとえ新開地のそれであっても、けっして時間や歴史に摩耗することのない、そこに住む人間の顔齢や容姿の衰退には無関係な地名でなくてはならぬ、あざみ野のご隠居とか美しが丘の刀自ではずいぶん形容矛盾になるではないか、などと悲憤慷慨してしまう。

しかし、モダンで開明的な神戸の街と縁のふかかった小林先生にはタマプラーザの街がよくお似合いだった、とぼくは思う。

「ドイツ語の小林先生」から、ということは、おなじ教授会に属しているとはいえ教室が違えばおのずから交誼に濃淡はあり、しかも、女の先生であってみれば当然のことながら遠慮を介在しての淡い交わりであったものが、ぼくたちの隣人である「タマプラの小林先生」になられてから、ぼくと細君はときどき美しが丘の街の中や、タマプラーザの駅や、また、ほとんど遠出をすることのないぼくたち夫婦が「川向こう」と呼んでいる多摩川沿いの東京の街のデパートなどで顔を合わせるようになった。あるときは毅然とした大学人の顔であ

り、あるときはその携える手の物から主婦としての先生を垣間みることもあったと思う。またあるときなどは双方とも家妻や良人を傍らにしているところをばったり出会うこともあった。会えば辞儀をする、挨拶を交わす、短い会話らしいものを送る。おたがいに子供をもたぬ夫婦らしいことは言わずとも分かっていたようで、ぼくが一人のときなどは、決まって孱弱な質のわが家妻の消息を聞きなさり、いかにおわすや息災なるやとたずねることをまるで習慣としているかのように思われたものであった。このことは研究館の廊下や学部事務室などでお目にかかったときも変わらず、如何におわすや息災なるやときまって先生は聞かれるのだった。ご自分が最初の入院をされて苦しい闘病を経てふたたび教壇に戻られてからでも、それは旧態をたもっていた。

年少のころ永いあいだ療養所暮らしを経験したことがあったぼくには、病後にはよく食べてよく眠ることがいっとう大事なことですあまりご無理はいけませんよすっかりよくなるまで極楽とんぼを決めこむことです、と一方的な養生訓を繰り返すだけだったが、しかし、この人の世には、よく食しよく眠り適切な治療をうけてもついに癒えぬ病があることを、そのときのぼくは忘れていたというのだろうか。

わが家では、二度目の入院をなさってからはいっそう「タマプラの小林先生」の病状を話柄にすることが多くなった。どうもはかばかしくないようだ、ずいぶん痛みがきついそうだよ、この夏の峠を越しさえすればきっとだいじょうぶよ。そして、われらの願いどおり先生はその夏を越えた。ぼくたちは最初の入院のときとおなじように、ふたりの名前でお見舞いの花を送ることにした。このころはすでに病室へのお見舞いは憚られる時期にあったからである。ぼくたちが抱きつづけてきた漠然とした不安はやがて現実のものとなった。最初の入院のときには丁重な礼状をいただいたのに、こんどはいつまでたってもそれは届こうとしなかったからだ。ペンをとるにはあまりにも篤い病状でそのときあったことを知ったのは、悲報がほどなくぼくたちを襲ったときであった。

葬儀の日も通夜の晩も、花に包まれた遺影を目にしたながら、ぼくは、あるほどの菊投げいれよ棺の中、という古人の句を何度も思い出していた。

小林佳世子先生のこと

岡崎 寿一郎

(英語)

小林佳世子先生が逝去されたことをイギリスで知りました。その瞬間、何を思ったのか、いまでは、思い出すことができません。ただ、もう二度と御会いすることができないという事実を現実のこととして感じたとき、どうしようもなく悲しみがこみあげてきたことを覚えています。思えば、私と小林先生とは、職場の同僚として十年以上の歳月を一緒に過ごしてきました。しかし、ついに、一度もゆっくりと御話しする機会をもつことなく御別れすることになりました。その気持を言葉にすることはできません。寡黙であられた先生は、教授会で、私の席の向い側にすわり、私たちの議論を、いつも真剣な表情で聞いていただきました。私は、潔癖な先生の目に出会うことがとても恐ろしく感じられました。でも、いまは、懐かしい先生の御顔とその目をもう一度見たい気持で一杯です。御冥福を御祈りいたします。

追悼 小林佳世子先生

中尾 俊光

(英語)

おかつぱ頭に小さな体、その小柄な肩に重そうなバッグを掛けて元気よく歩いておられるお姿は、まるでいつまでも変らぬ女子生徒のようでした。いつもひたむきで、純粋なものを求めてやまず、また、「そうそう」と言いながら大きく頭をふって頷きながら、賛意を表わされるご様子は、まるで少女のようでした。すべてにおいて私よりも先輩であり、ご指導をいただいております先

生を、このように申しますことをお許し下さい。

私が今の外国語部に転じて参りまして、暫く経った或る日、先生からお声をかけていただきました。それは、小林先生のご尊父様と私が同郷であること、そして彼の地には、先生ご自身もよくおいでになったとのことでした。

私は驚きと同時に、なぜか思わず先生にある種のなつかしさを感じました。あの山間いの、今なお田園そのものの風景をご存知の方が、この大都会の中で、しかも同じ職場においでになることが、私には本当に驚きでした。

このように親しみを感じながらも、それぞれの所属学科の違いということもあり、むしろ私の方でご遠慮申し上げている部分もありました。それだけに、道すがら、またキャンパス内などでの偶然の機会には、よくお話をさせていただきました。

思い起しますと、それは、先生が一年間の国内留学をおとりになり、たまたま夏季休暇中に、大学の資料室にコピーをとりにおいでになった時のことでした。先生のお顔の表情に以前とは違ったご様子が伺えましたので、「お元気でいらっしゃいますか」と声をおかけいたしました。先生の格別変りないご返事に、話はそのままになりました。その翌年四月には、国内留学を終え、教授会に復帰されましたが、その後、お体の不調を耳にするようになったと記憶しております。

やがて休職なさってよりの先生のご容態につきましては詳しく存知ませず、私は先生がやがて元気なお姿で復帰なさるものとばかり信じておりました。たまたま事態の深刻さを知りえました時、私はただただ茫然とするばかりでした。

先生は懸命にたたかっておられたのですね。その苦しいたたかいの中で、先生はご自身の一つの世界を見つけられたのですね——「自由になりたい……風となって、星となって……。」

淋しいことではありますが、もう悲しむことはいたしません。日頃、日常性に埋没し、ともすればその意識すらも薄らいでおりましたが、あらためて、先生の最後のお言葉に接し、静かに脚下照顧いたします時、私の求める世界も、不生不滅、不増不減の立場でありました。

先生のお別れの言葉にもありましたように、「空に輝く星々」を見る時に、また、「木々の間をすり抜けるそよ風」の中にある時に、小林先生をなつかしく思い出すことと存じます。 合掌

小林さんのこと

竹田正純

(フランス語)

小林さんと私は同じ駅から大学に通っていた。当然、私が駅前をうろうろしていると、小林さんに出くわしたり見掛けたりすることが何度かあった。一度はご主人とご一緒のところに出会って紹介していただいたことがあった。帰宅時にも何度か一緒になっている。そのうちのひとつ、組合の執行委員をしておられたころのことがとくに思い出されるのである。

二部の最後の授業を終えて帰るときだったかもしれない。かなりおそい時刻に、団交を終えて帰られる小林さんと同じ電車に乗り合わせるようになった。話題は、多分、その日の団交内容だったろう。話がひとしきり終わって沈黙のあと、ぽつりぽつりと自分の分担されている執行委員の仕事のことを話し始められたときのことははっきりおぼえている。小林さんは主に団交の記録をとっていた。帰宅前に一杯飲んだサラリーマンたちの酒臭い人いきれと騒音のなかで、背の高いほうではない小林さんが、下のほうから、「全部清書しているんです」と言った。私は最初は何のことかよくわからなかったが、団交中に当局と組合の話したことのすべてを記録し清書しているのだということが、しばらくしてやっと飲み込めたのだが、その大変さがどんなものかはかなり後にならないと私にはわからなかった。

当時は、寄付行為の改正、学長公選制をめぐる切迫した状況に学内はあった。団交で話される一言一句が全体に多大の影響を与える。私も寄付行為改正後に執行委員になってその残務整理めいたことをしたひとりだから、前委員会、

前々委員会が何を話し、当局がどう答えたかを知るために何度も団交記録を読んだものである。小林さんの記録は、驚いたことに、話された言葉が、そのまま記録されているのである。言い回しの一つ一つまでがそっくりそのまま書いてある。しかも、きちんとした綺麗な字で。私たちは団交中テープ・レコーダーは回さない取り決めになっているようだが、これではまったく同じことではないか。当局もずいぶん困っただろう。小林さんが速記のできることは聞いていたが、そこまで正確なものとは私は想像だにしていなかった。当局者の一人一人の話しぶりの特徴がはっきりわかるのだ。名前を伏せていても、ここはA氏がしゃべり、あそこはB氏がしゃべったのだとすぐわかる。吐息まで聞こえてきそうだった。大変なご苦勞をされていたのだと思う。

小林さんは几張面で優しく、嫌な顔一つしないでみんなの世話をしてくださった。しかし一面、物事に秩序を与えることに人一倍力を使った人ではないか、と私は勝手にも想像している。流れに身を任すことがなかなかできないのだ。私がいい加減な人間だから言うのかもしれないが、しかし、これには尋常ならざる意志の力があるものではないだろうか。小林さんは見事におやりになった。でも、死んでは何にもならないのである。長生きをされていて下さらなくてはならない。だらしなく生きていてもいいのだから、とだらしなく生きる私は思うのである。小林さん、安らかにお眠り下さい。

小林佳世子先生の思い出

果 荃 英

(中国語)

小林先生との出会いはいつごろだったか記憶がはっきりしません。たぶん十数年前になります。第一研究館に移ってから、研究室が隣の隣で、よく廊下ですれ違ったりした時、先生はいつもにこにこ挨拶をしてくださったものでした。先生のそういう時の笑顔がいまも目に浮びます。

仕事には熱心で、私の記憶では、お亡くなりになるまでに、よく一緒にLL委員会に参加したり、LL授業を担当させていただきました。委員会の会合や、同じ時間帯のLL授業でよく話をするようになりました。いまでもよく覚えていることは、たぶん先生が国内研修を終えられて、四月の新年度の授業の始まる数日前のこと、その日偶然にLL事務室でお目にかかって、先生から研修期間中、体調を崩して、いま健康食品に取り組んでいることをお聞きしたことです。その時先生はお顔色もよかったし、元気いっぱいでしたので、私はきっと研修期間に生活のリズムが変わったせいにはない、大学に戻ればよくなるでしょうと思った。いまから思えば、その時はもう重大な病気が始まっていたかもしれません。それから半年くらいたった秋に、LL委員会の席でそれまでにご担当の委員長を交代したいとおっしゃった。人一倍責任感の強い小林先生が途中で人事の交代を要請するくらいだから、やはり身体の具合が悪いんじゃないかと思った。あとで訳を聞いてみると貧血を起して、病院で輸血されたそうです。その後、その年の暮に手術を受けられたことを知らされました。翌年の夏休みにも再手術を受けられたとお知らせくださり、そして私の健康をも気遣って下さいました。最後にお目にかかったのは、私の長期欠勤の後、職場復帰の最初の授業の日、先生の研究室でどのくらいの時間か忘れましたがお話をしました。先生はあい変わらずにこにこして、たいへんお元気のご様子でした。話の内容はおたがいの健康のことでしたが、ただ一つ気になることがありました。それは冬休みに入ったら、また何かの治療を受けるとのことでした。その後約一年間くらい先生と話をする機会もあまりないままに突然先生の訃報をお聞きし、胸中驚愕の思いでいっぱいでした。

いまは亡き小林先生のにこにこしたお顔にもう接することができなくなりました。優しく、努力家で、責任感の強いお人柄が先生の思い出となりました。心から御冥福を祈ります。合掌。

小林佳世子先生を偲んで

細川幸夫

(スペイン語)

うすうすと佳世子先生の容体が思わしくないとの情報は得ていたが、それでも先生の訃報に接したときは神の摂理の無情さを知らされた思いであった。度々ご休養のあと大学でお見かけした様子では左程悪いようには見えなかった。佳世子先生は神戸のご出身で、私のマンションが神戸のポートアイランドにあることから先生との会話はもっぱら神戸の話題に終始した。大学も大阪外語大のドイツ語科から京大の大学院と生れも育ちも京阪神と私にはとても身近な存在に思えて、それだけ親しみも深く先生と神戸の話をするときは心もはずんだ。神戸の良さはやはり神戸で育った人には実感がこもっているものだから。

おかつぱ頭で丸顔のいつもにこにこ笑顔を絶やさないで、研究室と同じ階にある事務の小川さんのいる談話室でコピーなどをとりに見えたときのあの小柄な佳世子先生のありし日の姿を私たちはいつまでも思い出すことでしょう。

佳世子先生はその話し方にも、ちょっとした仕ぐさにも京都ではない、阪神間の女性らしい何の気どりもない人なつかしい親しみを感じたのは私ひとりではあるまい。駒沢大学外国語部教授会は本当に良い先生をひとり失ってしまったと悔やまれてならない。

お葬式に出て、お坊さんの読経ならぬ型破りの司会に始まって、生前に録音された佳世子先生の私たちに残されたごあいさつには胸をしめつけられる思いがした。残された夫君を気づかう深い妻の愛情が切々と聞く者の心に迫ってきて私は思わず涙を流しました。壮絶な病苦との戦いとその経緯、死出に旅立つ心境を述べられたくんだりには私たちに深い感動を与えると同時に、もしこのような不幸が我が身に起きたときはかくなるものかと慄然としたものでした。小林先生を偲んでこの一文を捧げるに当り、今はただ先生が天国で安らかな日々を

お過しなされることを祈るばかりです。

小林佳世子女史の思い出

杉山 秀子

(ロシア語)

小林佳世子女史と知りあったのは今から16年位前にさかのぼる。はじめて言葉をかかわしたのは旧国鉄駅構内のような殺風景な法政大学の講師室であったような記憶がある。佳世子女史は心の優しい方で性格も円満であられたが、なかなか芯のしっかりとした気骨のある方で、教育条件、研究条件、非常勤講師の生活条件の改善にもしっかりとした見解をもっていられた。また、非常に豊かな知性の持ち主で、好奇心も、探求心も共に人一倍旺盛で、研究者としてはもってこいの資質を具えていらしたようである。しかし「能ある鷹は爪を隠す」という言葉通り、衆目の前で御自分の知性や能力をひけらかしたり、伶俐ぶるといふことは一切なかったようである。常に一步、身をひいたところで大局的に物事を把握し、判断し、考慮し、慎重に行動をなさるといふきわめて注意深い御人柄であった。私生活においても決して出しゃばることなく、常にパートナーをたて、ちょっとしたことでもパートナーの意向をききながら、物事をすすめるタイプであった。このような一見控えめな慎重な傾向はえてして自我がないように誤解されることも稀にあったようであるが、事實は全く逆であることを故人の名誉のためにおことわりしておく。すべてを掌握し、自信があるからこそ、あのようふるまえたのだと私はむしろ感心さえさせられていたのである。

ところで、奥床しい女史の性格の中にも意外な側面があったことをここに付け加えておく。あるミニ・パーティでトランプ・ゲームをやった時である。そこで女史がトランプにめっぽう強いということを新発見したのである。勝運を招くというか、ゲーム強いというか、他の追随を許さぬ程の破竹の勢いで何度

かのゲームを勝ったのであった。周囲のものは女史の判断力の的確さにただ脱帽するのみであったことを記憶している。できることなら、強い勝運を招くカードをせめて一枚でも御自分のためにひいてもらいたかったというのが私のいつわらざる気持なのである。御冥福を切に祈る。

1990年3月27日夜

神戸にて